

ページ INDEX

- 1 大学博物館等協議会2012年度大会・第7回博物科学会開催報告
(京都大学総合博物館 館長 大野照文)
- 3 大学博物館が推進する地域貢献活動の展開
－特別天然記念物オオサンショウウオの保全を目指した地域と学生との協働－
(広島大学総合博物館 助教 清水則雄)
- 5 アジア地域における自然史系博物館の活動の推進
(国立科学博物館 植物研究部 細矢 剛)
- 7 香川大学博物館
(香川大学博物館 館長 寺林 優)
- 8 大阪大学総合学術博物館創立10周年記念事業
(大阪大学総合学術博物館 特任講師 松永和浩)
- 9 APRU大学博物館研究シンポジウム
－先端研究の中核としての大学博物館コレクションネットワークの構築－
(京都大学総合博物館 館長・教授 大野照文、准教授 本川雅治)
- 11 思い出に残る企画
－『The Art of Gaman 尊厳の芸術』展－
(東京藝術大学大学美術館 教授 薩摩雅登)
- 14 協議会加盟館の活動予定(平成25年度)
(金沢大学資料館、京都大学総合博物館、国立民族学博物館、東京藝術大学大学美術館、
名古屋大学博物館、新潟大学旭町学術資料展示館)

大学博物館等協議会2012年度大会・ 第7回博物科学会開催報告

京都大学総合博物館 館長 大野照文

大学博物館等協議会2012年度大会および第7回博物科学会が、去る6月21日・22日の両日、京都大学百周年時計台記念館および総合博物館で開催された。大学博物館等協議会

は、国立大学に付設する博物館・資料館・美術館・植物園が主体となり、国立科学博物館・国立民族学博物館等を含む39の加盟館からなる組織である。一方博物科学会は、協



文部科学省村瀬係長の挨拶



パネルディスカッションの様子



ポスター発表での活発な意見交換

議会加盟館の教職員とそれ以外の個人が参加し、博物館収蔵の学術標本資料などを用いた基礎的・応用的研究、教育活動の成果を発表している。今年度の両大会には、27機関、96名の参加があり、特別講演・パネルディスカッション、研究発表、施設見学などを行った。

大学博物館等協議会は、平成8年に出された、いわゆるユニバーシティ・ミュージアム設立の答申に基づいて国立大学に整備が開始された大学博物館を主な会員として発足した。当時すでに多くの大学博物館があったが、ユニバーシティ・ミュージアムの答申に基づいて設置された大学博物館には、膨大な数の学術標本資料の収集・維持・管理と、それらの研究教育への活発な利活用、さらに大学の社会に開かれた窓口として、博物館のみならず全学の研究・教育の成果を社会に発信する窓口としての役割を真摯に果たすことが求められた。そして、この3つの任務を効果的に遂行するため会員館同士、さらには会員館と、大学において高等教育を支える組織を統轄する文部科学省の担当部署との情報、経験の交換の場として設置されたのがこの協議会である。

平成16年、国立大学が法人化するに従って、大学博物館には、大学の社会貢献の窓口としての役割が強く認識されるようになり、協議会および協議会に合わせて開催される博物科学会でも、社会貢献の話題が多くなり、

また会議における挨拶もいつの時点からか文部科学省の社会教育担当の部署となった。しかし、情報発信については各大学において認知を受ける一方、学術研究・教育の基盤としての大学博物館の役割は必ずしも理解されているようには見られない。そこで、京都大会では、情報発信だけでなく、ユニバーシティ・ミュージアムの3つのミッションについての認識を新たにすることに重点を置いた。まず、大会初日、京都大学の 大西有三 理事・副学長から祝辞のあと、本来の所轄部署である文部科学省研究振興局学術機関課の村瀬誠 係長から挨拶をいただいた。また「大学博物館の原点」をテーマに、シンポジウムを開催した。

最初に京都大学 河野昭一名誉教授、九州大学総合研究博物館 岩永省三副館長の2名の特別講演があり、その後京都国立博物館 栗原祐司副館長、京都大学総合博物館 永益英敏 准教授を加えた4名による、パネルディスカッションを京都大学総合博物館 大野照文館長による司会進行で行われた。1996年学術審議会の「ユニバーシティ・ミュージアム」についての報告をきっかけとして全国の国立大学を中心に設置された大学博物館が母体となって誕生したのが大学博物館等協議会である。その発足以来10年余りの豊富な経験の蓄積が報告された。その上で学術標本資料の収集・保全・利活用など、大学博物館の原点に立ちかえって私たちが何を目指したのか、活発な討論がされ、大学博物館の未来像の構築とその実現への足がかりとなった。

翌日、会場は京都大学総合博物館に移動して博物科学会の研究発表を実施。12編の口頭発表、11編のポスター発表が行われ、地域社会連携と博物館の役割を中心に活発な質疑応答が行われた。

発表後や会議の合間、さらには初日の交流会では多くの参加者の間で展示会の情報交換や学術標本の保全、利活用などの意見のやり取りが行われ、こうした協議会や学会活動を通して、大学博物館等の相互連携がより深まることがこれからも期待される。

大学博物館が推進する地域貢献活動の展開

－特別天然記念物オオサンショウウオの保全を目指した地域と学生との協働－

広島大学総合博物館 助教 清水則雄

はじめに

広島大学総合博物館の重要なミッションの1つは「社会に開かれた大学の架け橋」としての社会貢献・地域連携活動です。2006年の開館以来、地元の自然をテーマとした里海、里山に関する常設展示をはじめ、地域性を重視した企画展(宮島展、瀬戸内海展、里山展)を積極的に実施してきています。また、これらの展示コンテンツを地域の美術館や道の駅などに出張展示する出前博物館を開催するなど、「地域貢献」を博物館活動のひとつの核として活動を行ってきました。研究面においても大学が実施している「広島大学地域貢献研究」に積極的に応募し、これまでに平成19、21年度に実施しています。このようななか、昨年度新たに地域との協働による地域連携推進事業「東広島市における国の特別天然記念物オオサンショウウオの分布調査と教育普及活動」を実施しましたので、今年の本会の口頭発表に引き続き、その経過をお知らせします。

広島大学地域連携推進事業

広島大学では、産学・地域連携センターにより、「大学とつくる地域のゲンキ」と題して、地域の個人や団体に対して以下の2タイ



オオサンショウウオ
Andrias japonicus (Temminck, 1836)

プの地域連携推進事業の公募を行なっています。研究協力型：広島大学の専門家による、地域の問題の解決や新たなノウハウの開発を希望する場合。地域協働型：地域での取り組みに、広島大学の教職員・学生の参加や支援を希望する場合。この2タイプの事業に地域の方々からご応募頂き、学内に提案テーマを回覧し、学内の研究者が提案に答える形で応募します。審査を経て採択されると活動資金が支援される制度です。我々は昨年度までの調査結果を踏まえ、継続的な調査とともに教育普及活動が重要であると考え、博物館を媒介とした講演会、観察会、出前博物館の実施を盛り込んだ地域協働型として採択して頂きました。

経緯

世界最大の両生類であるオオサンショウウオは、国の指定する特別天然記念物であり、本学が所在する中国地方が分布の中心です。残念ながら世界的な両生類の減少が叫ばれるなか、本種も同様にその数を減じています。いまだ詳細な分布や幼生の動向など、保全に不可欠な情報の解明には至っていないのが現状です。

当館が所在する東広島市には、現在も本種が生息していることが地元の少数の市民の間で知られていましたが、少子高齢化のため地元の保護団体の活動が減衰(実働会員3名)し、市や県などの担当部署に情報が十分に届かず、本種の生息を無視した河川の護岸工事が公然と行われている状況でした。そこで、我々は地域の重大な問題と受け止め、博物館が核となって大学の持つ学術性と学生の若い力を活用した野外調査と教育普及活動を地域住民との協働により開始しました。

プロジェクトの内容

プロジェクトの実施体制として、総合博物館を核として教職員2名、5学部の学生14名からなるチームを編成し、東広島市の都市部に所在する東広島市自然研究会(会員数約100名)、地元のオオサンショウウオを守る会、広島市安佐動物公園、東広島市教育委員



野外調査の様子。
河川に入りオオサンショウウオを捜索中

会と連携して現地調査と教育普及活動を計38回(平成24年度)実施しました。

現地調査では、総合博物館が参加学生を募集し現地調査の実働部隊を担いました。東広島市自然研究会は調査補助と地元や市との全体の調整、オオサンショウウオを守る会には現地案内、広島市安佐動物公園には調査指導、東広島市教育委員会には文化庁への調査の届出、立会いをそれぞれお願いしました。

教育普及活動は野外調査の成果を公開講演会、現地観察会、出前博物館、全国大会での学生による発表の形で連続的に実施しました。

成果

大学博物館・教育委員会の参加のもとオオサンショウウオの成体をのべ19個体確認し、複数の産卵巣穴をつきとめ繁殖行動、卵、幼生を確認しました。これらから本調査地が本種の保全上極めて重要な再生産場所であることを立証し、巣穴から巣立った幼生の分散過

程の一端も合わせて解明することができました。これにより、下流域の護岸改修工事では隠れ家、魚道が新設されるなど本種に配慮した工事が行われるようになりました。また、産業廃棄物処理業者などによる大規模な土地取得にも制限がかけられることとなり、東広島市による重点保護区域指定への動きも始まりました。これらは、大学博物館が介在したことで、自治体にとっては協力しやすい体制となっていると考えています。

さらに、本活動の過程で、東広島オオサンショウウオの会が発足することになりました。少子高齢化により活動が減衰していた地域の団体に、東広島市の都市部に所在し、会員数の多い東広島市自然研究会が加わったことで、当面の活動は担保されることとなりました。

これらの成果は公開講演会(来場者113名)、現地観察会(4回のべ来場者100名)、出前博物館(2日間1,132名)にて継続的に地域に発信しマスコミを含め数多く方々に反響を頂きました。また、学生による日本オオサンショウウオの会での口頭発表においても好評を頂き、H26年度の「第11回日本オオサンショウウオの会全国大会」の候補地となるなど、過疎化の進む地域の“地域資源”としての本種の魅力を広く発信できたと考えています。現在は、地域住民の方々、東広島市教育委員会と本会の開催に向けて、いかに地域を巻き込んだ会とできるかを協議中です。本成果は学生対象の東広島市地域課題懸賞論文に「東広島市豊栄町に生息する国の特別天然記念物オオサンショウウオの保全に向けた実践的研究」として学生(総合博物館技術補佐員)が応募し、最優秀賞を受賞するなど高い評価を頂きました。

今後の展開

オオサンショウウオの保全活動は学びの場として機能しており、夜間の野外調査や、本種に触れる非日常の体験は、参加者への知的好奇心の喚起と活動継続の原動力となっています。さらに、通常接点のない地域住民の皆様と学生との交流の場として、学生の社会勉強の場としても機能しています。今後は本活



現地説明会の様子



野外観察会後の記念撮影

動に学生が継続的に加わることで、調査の充実と更なる活動の活性化を行なっていく必要があります。特に学生は卒業により地域を離れる場合が多く、大学博物館を核とした継続性のある活動システムの構築が急務であると考えています。また、地元の小中学生らを対象とした観察会などを精力的に開催し、地元の若い力を取り入れた調査・保全活動の実施が大きな課題と考えています。本活動はまだ始まったばかりであり、課題も山積しています。しかし、短期間に地域・大学・自治体それぞれの特性を活かした学園都市ならではの活動体系の基礎を作ることができたと思います。大学の専門性・学術性が付与された地域に根差した保護活動は野生動植物保全の新たなモデルケースになるものと期待しています。

アジア地域における自然史系博物館の活動の推進

国立科学博物館 植物研究部 細矢 剛

本稿では、国立科学博物館のアジア地域における自然史系博物館の活動への貢献として、最近開催されたアジアの絶滅危惧種・移入種・チェックリスト統合へ向けてのワークショップを紹介する。このワークショップは、国立科学博物館によって主催されたが、地球規模生物多様性情報機構(以下GBIF)の活動とも深く関わっているものであるため、まず背景について紹介する。

GBIFとは

OECDのメガサイエンスフォーラムの勧告によって2001年に発足した国際プロジェクトであり、「生物多様性情報が、科学・社会・継続維持できる未来のために無償で普遍的に利用できる」時代を想定し、「生物多様性情報の全地球的なリソースとして最重要であり、人類と環境のための、スマートな問題解決を引き出すしくみ」となることを使命としている。集積されたデータは<http://www.gbif.org/>からダウンロードでき、現在自然史標本と観察データ約3.9億(2013年3月現在)が公開され、利用できる。しかし、そのデータの約7割は欧米からのもので、アジアからのデータは全体の約3%に過ぎない。

活動の地域化

GBIFはコペンハーゲンに事務局をおき、87の参加団体(国あるいは国際的機関)が参加している。近年、参加団体が増加し、事務局の専任職員だけでは十分サポートができなくなった。そのため、全世界を6地域(アジア・オセアニア・北米・ラテンアメリカ・ヨーロッパ・アフリカ)に分けて活動を地域化し、各地域で協力体制を確立し、自立的に活動することが必要となった。日本はアジア地域に所属し、その活動に積極的に参加している。しかし、アジア地域は、言語や文化的にも、自然環境についてもきわめて高い多様性に富んでおり、共同作業は容易なことでは



討議風景



参加者による記念撮影

ない。そこで、共通の科学的興味として、1) 各国のレッドリスト種、侵略的外来種、渡り鳥、などのチェックリストの統合、2) 魚類データベースを通じてみたアジアの多様性喪失とリスク評価の2点を提案し、共同的な活動を推進している。

ワークショップの開催

豊かな生物多様性を擁するアジア地域において、生物のチェックリストは調査済みの地域ばかりでなく、未探索の地域でも生物多様性を知る上でも有用な情報である。しかし、そのようなリストはほとんどの国において整備されておらず、わずかに存在するリストも地域間で統合は図られていない。全生物の多様性を把握するためのチェックリスト作成を目標とした最初の段階では、絶滅危惧種や移入種のような重要な種についてのリストを作成することが妥当かつ重要と考えられる。また、アジア地域の絶滅危惧種統合リストの作成は、環境省系のプロジェクトでも目指していることであり、植物研究部における研究テーマの一つでもある。

そこで、2013年3月12-13日、国立科学博物館研究部において、アジア各国から代表者を招いて、絶滅危惧種・移入種・チェックリストの現状を調査・把握し、アジアの統合リストを作成する上での情報収集を行い、今後の活動に繋げる上での布石とするためのワークショップを開催した。インドネシア、マレーシア、台湾、韓国、フィリピン、タイ、

ベトナムの7か国に加え、フィリピンにある ASEAN Center of Biodiversity (ACB) から代表が集結(合計11名)した。これらの代表は、GBIFアジア地域の代表者である ACBからの推薦にも配慮したものである。

まず、日本の研究者から統合された生物多様性情報を利用した事例を発表し、リスト統合の重要性をアピールした。次に、各国からのチェックリストの現状を報告し、アジア統合レッドリスト・移入種リスト・チェックリストについての認識の共有を図り、統合リスト作成へ向けての方途を議論した。具体的には、どのような形式で、どのようなデジタルデータを提供すべきかについて議論し、現在GBIFから提唱されている DarwinCore と呼ばれる形式にほぼ則った形でまとめることで合意された。

これからの展開

博物館にある標本は生物多様性情報の基本証拠物である。集積されたデータとその利用についての重要性は、今後さらに高まるものと考えられるが、アジア地域の生物多様性情報は圧倒的に不足している。生物多様性が時代のキーワードとなった現在、生物多様性情報を集積する国際活動には積極的に参加し、このような活動を一般にもアピールすることが大切と思われる。

香川大学博物館

香川大学博物館 館長 寺林 優

開館5周年記念特別展開催

2008年4月24日に開館して2013年4月に5周年を迎えるにあたって、開館5周年記念特別展「フクイサウルスがやってきた！～骨から学ぶ生物進化～」を2013年3月7日（木）～4月7日（日）（合計28日間）に開催した。福井県立恐竜博物館の協力でフクイサウルス・テトリエンシスとフクイラプトル・キタダニエンシスの復元全身骨格標本、株式会社日本ドルフィンセンターの協力でスナメリの骨格標本、本館所蔵のヒト、黒毛和牛、ネコ、ニワトリ等の骨格標本を展示した。3月7日（木）の開展式では、長尾省吾香川大学長の挨拶の後にテープカットが行われ、引き続いて松本由樹同展実行委員会委員による恐竜とその他の骨格標本の比較解剖学視点による観

察の仕方についての解説があった。本館の通常の休館は日・月曜日、祝祭日であるが、会期中は特別に日曜日と祝祭日も開館し、報道機関の取材と相まって2,185名の来場者があった。

会期中の3月16日（土）には、第26回ミュージアム・レクチャー「骨付き鳥の恐竜学」（講師：松本由樹同展実行委員会委員・農学部准教授）を開催し、「讃岐うどん」に次ぐ香川県のご当地グルメとして人気を集めている「骨付き鳥」を参加者一人に一本ずつ準備し、展示してある骨格標本と見比べたり、自分自身の骨や筋肉を触ったり動かしながらのレクチャーでは、33名の参加者が熱心に楽しく学んだ。さらに、3月28日（木）には、第27回ミュージアム・レクチャー「クジラの祖先は4本足で陸上を歩いていた」（講師：石川 創下関海洋アカデミー鯨類研究室室長、寺山弘樹日本ドルフィンセンター代表取締役社長）を開催した。60名の参加者は、大型鯨類や小型鯨類について骨格標本の観察を交えながら学んだ。講師として予定していた太地町立くじらの博物館の阪本信二氏が、貴重な腹びれのあるバンドウイルカ「はるか」の体調不良（4月4日に死亡）のため来られなかったのは残念であった。



テープカット



展示会場

平成25年度科学分野の文部科学大臣表彰受賞

科学技術分野に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者に贈られる平成25年度科学技術分野の文部科学大臣表彰を、本館館長の寺林優工学部教授、同副館長の伊藤文紀農学部教授、同元副館長の山本珠美生涯学習教育研究センター准教授、松本由樹農学部准教授、松下幸司教育学部附属教育実践総合センター准教授の5名が受賞した。表彰式は、2013年4月16日（火）に文部科学省において執り行われた。

科学技術賞の理解増進部門は、青少年をはじめ広く国民の科学技術に関する知識の普及啓発等に寄与する活動を行った個人又はグループに贈られるもので、「自然史系標本資料活用の拠点形成による科学への理解増進」



表彰式に出席した4名



高松市長を表敬訪問

の業績が高く評価されたものである。本館は2008年4月に、四国初の大学博物館として開館し、学内の異なる専門分野の教職員が参画して、企画展、公開講座、講演会、ミュージアム・レクチャーなどを多数開催してきた。さらに、独立行政法人科学技術振興機構のサイエンス・パートナーシップ・プロジェクトによるフィールドワークを中心とした講座を何回も実施してきた。それらの活動によって大学博物館を拠点とした自然史科学に関する学内外との交流および協働が実現し、地元住民の自然史系標本資料に対する関心と意識が高まるなど、科学への理解増進に大きく寄与した。

また、今回の受賞について、長尾省吾香川大学長へ報告した他、大西秀人高松市長および細松英正香川県教育長を表敬訪問し、受賞を報告するとともに、今後の地域および学校との連携を一層深めていくことについて、意見を述べ合った。

大阪大学総合学術博物館創立10周年記念事業

大阪大学総合学術博物館 特任講師 松永和浩

2012年4月、大阪大学総合学術博物館は創立10周年を迎えた。2012年度は記念事業として、春秋の特別展・企画展と講演会・シンポジウムを開催、収蔵庫棟を新設した。

4月7日（土）～6月30日（土）に第5回特別展「巨大ワニと恐竜の世界—巨大爬虫類2億3千万年の攻防—」を開催した。大阪大学豊中キャンパス内で発掘された約50万年前のマチカネワニ化石（当館所蔵、常設展示）は、世界的にも貴重なタイプ標本である。マチカネワニをはじめ、巨大ワニや恐竜の化石約50点を展示し、ワニの進化と恐竜との争いの歴史に迫った。関連企画としてミュージアムレクチャー3回、恐竜の復元画・復元模型をつくるワークショップ2回を開催した。いずれも親子連れを中心に、多数の参加者を得た。会期中の来館者は過去最高の11,823人を記録した。発掘現場となった本学理学研究科、地元の豊中市・同教育委員会、北海道大学総合博物館との共催であった。当館の展覧会にとっては初めての、大学博物館間での連携であった。

10月27日（土）～2013年1月19日（土）開催の第14回企画展「ものづくり 上方“酒”ばなし—先駆・革新の系譜と大阪高工醸造科—」は、特別展から一転、“大人向け”の展覧会となった。日本列島の酒づくりの歴史において、上方は先駆的・革新的役割を果たしてきた。その上方の地に明治30年（1897）、日本初の醸造学高等教育機関として大阪高等工業学校（大阪大学工学部の前身）に醸造科が設置された。江戸を席卷した伊丹酒、ジャパニーズ・ウイスキー発祥の山崎蒸溜所（現・サントリー山崎工場）や、日本人初のウイスキー技師・竹鶴政孝（ニッカウキスキー創業者）をはじめとする大阪高工醸造科出身者について、歴史・文化・産業・技術など多方面から紹介した。当館が目標とする文理融合の展示となった。会期中の11月24日（土）には創立10周年特別企画「酒ヲ愛デ、

文華二酔フ～絵に酔い、酒に酔い、音に酔い～」を催し、定員100名を超える参加希望者があった。その他、ミュージアムレクチャー4回、試飲会3回の関連企画は、いずれも盛況であった。会期中の来館者は3,715名を数えた。

6月22日（金）には創立10周年記念特別講演会「伝統と革新—ユニバーシティ・ミュージアムが発信する学際研究—」を開いた（大阪大学会館）。講師として、中坊徹次氏（京都大学総合博物館教授）・蓑豊氏（兵庫県立美術館館長・金沢21世紀美術館特任館長）を招いた。中坊氏は話題となったクニマス発見の経緯から標本資料の重要性を強調し、蓑氏は博物館の持つ街への影響力を語った。参加者は142名であった。

シンポジウムは「奈良の大仏はなぜ“若くみえる”のか？—美術史、化学、修復からみた金銅仏の最新研究—」、「オオサカがとんがっていた時代—大阪のアヴァンギャルド芸術—焼け跡から万博前夜まで—」の2回を、それぞれ9月8日（土）大阪大学会館、11月25日（日）大阪大学中之島センターにて開催した。前者では美術史から藤岡穰氏（本学文学研究科教授）、化学から笠井俊夫氏（本学名誉教授）、修復から八坂寿史氏（美術院国宝修理所主任技師）が報告した。後者では第1部「戦後大阪の美術とグタイピナコテカ」、第2部「大阪のアヴァンギャルド芸術とは何だったか—美術・デザイン・舞台・音楽—」の二部構成で、各種文化芸術の作家・批評家をパネリストに招き討論した。参加者はそれぞれ135人、156人であった。

5月には展示施設である待兼山修学館の隣に高機能収蔵庫が竣工した（2階建て・延べ床面積389㎡）。当館は昭和3年（1928）竣工の大阪大学会館、同6年竣工の待兼山修学館と、学内で最も古い建物を利用しているため、収蔵機能に大きな問題を抱えていた。高機能収蔵庫の設置により、学内外からの資料蒐集活動を積極的に行えるようになった。

さてこれからは、次の10年、さらにその先を見据えながら、大阪大学総合学術博物館のあるべき姿を追い求めていきたい。

APRU大学博物館研究シンポジウム —先端研究の中核としての大学博物館コレクションネットワークの構築—

APRU Research Symposium on University Museums: Forming a University Museum Collection Network As the Core of Frontier Research

京都大学総合博物館 館長・教授 大野照文、准教授 本川雅治

京都大学総合博物館では、かねてからJSPSアジア・アフリカ学術基盤形成事業（2011 - 2013）に採択された「東アジア脊椎動物種多様性研究基盤と標本ネットワーク形成」事業等で、標本コレクションを基盤とする国際的研究・教育ネットワーク構築を進めてきた。この流れをさらに環太平洋まで地域を拡大して発展させるため、当館では、平成24年9月12日～14日にかけて、表題のようなシンポジウムを開催した。京都大学およびAPRU（Association of Pacific Rim Universities：環太平洋大学協会）との共催で、京都大学教育研究振興財団からの助成を受けた。APRUは、環太平洋地域の16カ国（地域）42大学が加盟する国際大学連合で、相互理解を深めることにより、この地域の社会にとって重要な諸問題に対し、教育・研究の分野から協力・貢献することを目的として1997年に設立され、日本からは本学のほか、慶應義塾大学、大阪大学、東北大学、東京大学、早稲田大学の計6校が参加している。

本シンポジウムには、APRU加盟大学を中心に13カ国より100名が参加、口頭発表、ポスターセッション、ワークショップが3日に渡って行われた。標本という大学博物館の根幹をしっかりと見据えたシンポジウムは類例がなかったためか、タイトなスケジュールにもかかわらず熱気が途切れることなく、活発な経験・意見交流が行われた。また、総合博物館の常設展・企画展および文系・理系の収蔵庫の見学ツアーも行われた。

本シンポジウムでは、以下に述べるように、大学博物館の標本が、従来の博物科学における研究・教育はもとより、バイオテクノロジー、地球環境の復元・予測、維持可能な天然資源利用、民族融和などの多岐にまたがる

分野とつながりを広げつつあることが報告された。

シンガポール大学では、分子生物学の研究素材としての生物組織標本の冷凍保存を重視した標本収集がなされていることが報告された。東北大学からは、微小化石の非破壊3次元画像取得技術とその古気候復元への応用の可能性について報告があった。収蔵については、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学が、標本を収蔵庫と展示場を兼ね合わせた場で展示するという大胆な試みを行い好評であることが報告され注目された。また、これらの標本の利活用を円滑にするためのデータベース化についても貴重な学術標本資料のデータベース化が国際協力によって行われている事例などが紹介された。国立台湾大学と京都大学が協力して現在進行中の植民地時代に京都大学が収集した植物の押し葉標本のデジタルデータベース化がその一例である。

カリフォルニア大学や京都大学の研究資源アーカイブからは、標本を基に行われた研究

の背景を記した著名研究者のフィールドノートなどを広くアーカイブ化することが、大学の研究・教育の活性化につながる可能性をもつことが報告された。展示を博物館から市中に持ち出す大胆な試みについても東京大学から報告された。美学的に選び抜かれた学術標本が世界中の都市で展示され好評を得ている。

また、ワシントン大学からは先住民族の遺跡の考古学発掘調査において、当事者と協働することで、多様な民族・文化の相互理解の橋渡しなど、従来の「アウトリーチ」の枠を超えた大学博物館ならではの地域・国家・国際社会への貢献が可能なことが報告された。運営設立形態については、日本の主要大学のように、一カ所にまとめて総合博物館化したものや、各学部等に分散したものをネットワーク化したものなど様々あり、博物館の運営上のそれぞれの短所・長所についても議論された。

本シンポジウムでは、大学博物館が密接に協力して国際ネットワークをつくり、標本を



参加者集合写真



討論の様子



開会式・APRUのSecretary Generalの
Christopher Tremewan氏の挨拶



懇親会

大学での研究・教育はもちろん、国際社会への貢献などにより活発に活用してゆくことが重要だとの合意に達し、シンポジウムの定期的な開催が決議され、APRUの事務総長Tremewan氏も全面的協力を約束された。現在、国立台湾大学が第2回目のシンポジウムの開催に向けて準備を開始されている。

思い出に残る企画

—『The Art of Gaman 尊厳の芸術』展—

東京藝術大学大学美術館 教授 薩摩雅登

2012年10月に東京藝術大学大学美術館で立ち上げて、2013年8月まで全国を巡回している「The Art of Gaman 尊厳の芸術」展は、私にとっては思い出深い展覧会のひとつになるであろう、ということで、この企画の発端から実現までの経緯を簡単に紹介してみたい。皆様方が今後に展覧会を企画する際の参考・一助にでもなれば幸いである。

2010年にアメリカのスミソニアン博物館で開催された展覧会『The Art of Gaman』は大好評を博し、同年11月にNHKの「クローズアップ現代」で日本にも紹介されて話題となった。これは、第2次世界大戦中に強制収容所に隔離された日系アメリカ人たちが、風雨や砂塵が吹き込むような粗末な仮設住宅（バラック）での生活環境を少しでも改善するために、道具や材料を苦労して調達しながら作り上げた家具、置物、装身具などを一堂に集めた展覧会であった。朽木や廃材から彫り上げた置物、土中深くから掘り出した貝殻で作った装身具などの出来映えからは創作という行為への純粋な喜びが、また、木を削り抜いて作った仏壇、おそらくガラスで磨きあげた硯などからは、故国から遠い異国の荒野や砂漠にあっても自分たちのルーツとアイデンティティーを忘れない人間の心意気までが伝わってくる。これらの作品は所謂「名品」ではないが、まさに人の心の琴線に触れるものであった。

私自身もこの企画を日本でも実現できないかと漠然と考えたが、アメリカでもスミソニ

アンでの大成功を受けて新たな巡回展が企画され、日本でもNHKが視聴者の声を受けて開催を検討し始めた。2011年2月にNHKから企画への協力・監修を依頼された私は、これらの作品を今の日本人に、なによりも東京藝術大学の学生たちに見せたいと思いながら、自分の仕事としてこの企画を実現させようと心に決めた。

それからはお決まりの学内調整である。「学問の自由」を自ら否定しないためにも、大学ではひとりの教員の発案や企画は互いに潰し合わないことが原則であるが、現実は大学社会の中の複雑で独特な人間関係の中での調整が必要になる。今回は幸いにも大学美術館の同僚教員、大学美術館長、学長などの好意的な了解があり、2011年6月には作品調査のためにサンフランシスコとロサンゼルスに飛ぶことができた。そこで初めて作品を手にとって見てあらためて驚いた。私は美術史学と博物科学を専攻しながら美術館という現場で仕事をしているので、自分の手で物に触れれば、大家の作品から子供の作品まで、技術とは別の次元で、作者がその制作にどれほど心を込めたか、手間ひまをかけたかなどを感じ取ることができる。一例を挙げれば「平家納経」を手にした時には、絵巻物というよりも秀逸な工芸品のような出来映えに全身が緊張するほどであった。それに匹敵するとはまでは言わないが、サンフランシスコ郊外の殺風景な倉庫の中で手にしたこれらの作品群は、たとえ技術的には稚拙なものであっても私の手の中で圧倒的な存在感を示していた。

2011年12月には、シカゴ郊外のホロコースト・ミュージアムで開催されていたアメリカでの巡回展を調査に行った。ミュージアムの基金にユダヤ資本があるのか、会場の構成は日本の大学では考えられないほどに贅沢な施行で羨ましくもあった。しかし倉庫内で点検した作品運送用の段ボール箱はとて航空輸送には耐えられない脆弱なもので、新たな段ボール箱とそれを入れる木製クレートの制作などが課題として残った。

関係者の尽力で準備が整って、2012年10月に作品集荷のために再度サンフランシスコ

に飛んだ。郊外の運送会社の倉庫には、指示通りに段ボール箱と木製クレートが新調されていたが、いざ、作品の点検・梱包の時にあって我々は頭を抱えてしまった。アメリカでの巡回展では全体に責任を持つキュレーターはいなくて、作品だけが運送されて、各会場が独自に（勝手に）展示をしたらしい。そのために、ひとつの作品に複数の番号が付されていて、それらに全く脈絡も整合性もない。つまり規定の作品リストから作品と箱が的確に照合できないのである。おそらくアメリカでは作品の開梱、展示、撤去、梱包などの作業に日本の何倍もの時間をかけて、作品と箱を直接に照合したのだろう。しかし、いくつものパーツに分かれている作品もあるし、複数の作品がひとつの箱に入ることもあるから、これから1年間をかけて日本全国を巡回

するには、作品番号、箱番号、クレート番号が確実に記載された作品リストが必要だし、作品の数と番号が混乱しては通関手続きすら取れない。そこで私たちは今までの番号は一切無視して、新たな「ジャパニーズ・ナンバー」で作業を進めることにした。

7個のクレートと共にサンフランシスコを発って成田に着いたのは10月24日。クーリエ（courier 本来は外交用語、転じて貴重品を搬送する時の責任者）として作品に付き添っていると着陸時は緊張するが、今回は衝



図1 収容所の風景（作者不詳）



図2 三段引出（ギイチ キムラ）



図3 硯（ホウメイ イセヤマ）



図4 蛇（タキゾウ オバタ）

撃の少ないランディングでほっとした。日本側での事前の準備と手配はさすがに万全で、通関から展示作業まで全て順調に進み、また、我が大学美術館の助手（学芸研究員）たちの仕事ぶりも見事であった。最近の美術館学芸員の中には、展示作業を全て運送会社に任せて自分で展示をしない、とりわけ古美術品や工芸品を取り扱えない人が多くなってきたが、さすがに藝大の助手の力量は確かであった。

こうして約1年半をかけて2012年11月1日に完成した展示空間をひとりで歩きながら、私は体の疲労と心の充足を感じていた。展覧会とは要するに環境芸術・空間造形芸術であるから、内容の独創性（あるいは学術性）と展示の技術力が求められる。不自由な生活の中で精魂込めて制作された作品群が醸し出す独特な雰囲気と緊張感を肌で感じて、私はこの新鮮な展覧会が日本でも好評を博すことを確信したのであった。

第二次世界大戦中の強制収容所という歴史的事実は、当事者と御子孫にとっては忘れてしまいたいに苦い思い出かもしれない。また、自由と民主を謳うアメリカにとっては歴史上の汚点かもしれない。しかし、そこで生活をした人たちは創作という喜びを見いだして、過酷な環境の中でも明るく前向きに生きることの素晴らしさを、人間の尊厳を、後世の我々に伝えてくれる珠玉の作品を残してくれた。それらの品々を物資と情報に満ち溢れた21世紀の日本に紹介することができて、私にとっては久々に会心の展覧会であった。

今後の予定

6月1日(土) — 6月30日(日)

浦添市美術館 主催：NHK沖縄放送局

7月20日(土) — 9月1日(日)

広島県立美術館 主催：広島県立美術館

NHK広島放送局

協議会加盟館の活動予定 (平成25年度)

金沢大学資料館、京都大学総合博物館、国立民族学博物館、東京藝術大学美術館、名古屋大学博物館、新潟大学旭町学術資料展示館

金沢大学資料館

新歓展

あなたは何学域？
—人間社会・理工・医薬保健学域の
前身校と先人—
(新収藏品+再発見資料展)
平成25年4月10日～6月21日



企画展①

ウォール・チャート・アーツ(仮)
平成25年7月上旬～9月下旬

特別展

四高物理機器展(仮)
平成25年10月中旬～11月中旬

城内写真展

よみがえる城内キャンパス
平成25年11月初旬～中旬
場所：金沢城址公園内 鶴の丸休憩所

企画展②

リアリスチック・スコープ
(ステレオ・スコープ) とカメラ展(仮)
平成25年12月上旬～3月下旬

京都大学総合博物館

秋季企画展

日本の海 自然史と人のいとなみ展(仮)
平成25年7月31日～12月1日

特別展

地図の中の日本と世界展(仮)
平成25年7月31日～9月1日

西田幾多郎遺墨展
平成25年10月30日～12月1日

ねむり(仮)
平成26年3月6日

国立民族学博物館

特別展

マダガスカル 霧の森のくらし
平成25年3月14日(木)～6月11日(火)

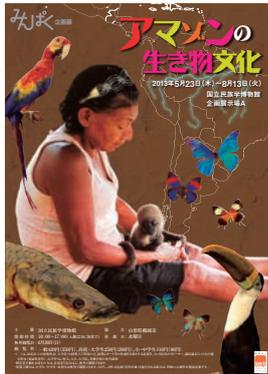


企画展

アリラン-The Soul of Korea
平成25年5月2日(木)～6月11日(火)



アマゾンの生き物文化
平成25年5月23日(木)～8月13日(火)



興福寺創建1300年記念 国宝興福寺仏頭展
平成25年9月3日(火)～11月24日(日)

武器をアートに
ー モザンビークにおける平和構築
平成25年7月11日(木)～11月5日(火)

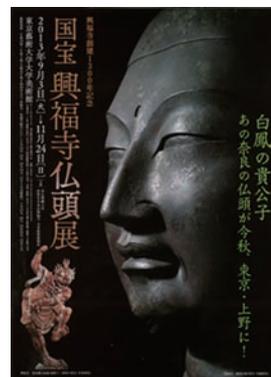
台湾平埔族の歴史と文化(仮題)
平成25年9月12日(木)～11月26日(火)

特別展

渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館
Attic Museum
平成25年9月19日(木)～12月3日(火)

本館展示新構築

日本の文化のうち「沖縄地方の暮らし」と「日本のなかの外国人」展示、朝鮮半島の文化展示、中国地域の文化展示の新オープン
平成26年3月



木幡和枝教授退任展(仮)
平成25年10月12日(土)～10月20日(日)(予定)

元倉眞琴教授退任展(仮)
平成25年11月14日(木)～11月28日(木)(予定)

東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展
平成25年12月15日(日)～12月24日(火)

佐藤一郎教授退任展(仮称)
平成26年1月6日(月)～1月20日(月)

「見ること」「描くこと」
ー 油画技法材料研究室出身者による(仮称)
平成26年1月6日(月)～1月20日(月)

東京藝術大学卒業・修了制作作品展
平成26年1月26日(日)～1月31日(金)

永田和宏教授退任展「たたらと和鉄」(仮)
平成26年3月15日(土)～3月21日(金・祝)(予定)

東京藝術大学大学美術館

FENDI – UN ART AUTRE
Another Kind of Art,
Creation and Innovation in
Craftsmanship
～フェンディ もうひとつのアート、
クリエイションとイノベーションの軌跡
～ 大学美術館
平成25年4月3日(水)～4月29日(月・祝)

藝大コレクション展 春の名品選
平成25年4月5日(金)～5月6日(月・祝)

夏目漱石の美術世界展
平成25年5月14日(火)～7月7日(日)

名古屋大学博物館

特別展

くじら クジラ 鯨
平成25年3月25日～7月20日



企画展

ムラージュ～科学教育をささえた蠟細工～
平成25年8月6日～10月19日

「氷壁」を超えてーナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯ー
平成25年11月5日～平成26年1月30日

スポット展

ボタニカルアート作品展：平成25年度
平成26年2月4日～2月15日

特別展

石器を知るヒト、知らないヒト：技術と人類進化のなぞ
平成26年3月4日～7月12日

スポット展

津波に流された標本：吉崎誠海藻コレクション
平成26年3月11日～3月22日

新潟大学旭町学術資料展示館

博物館でお花見を！
平成25年3月30日～5月26日
場所：新潟大学旭町学術資料展示館



Wave from Sweden ー スウェーデン現代美術館家 ART MINERS ー
平成25年7月27日～8月25日
場所：新潟大学旭町学術資料展示館、砂丘館、安吾 風の館、旧齋藤家別邸、北方文化博物館・新潟分館

微化石展 ー 地層の中の小さな芸術品 ー
平成25年7月13日～8月30日
場所：新潟大学駅南キャンパス ときめいと

MUSEO ACADEMIAE 第15号
大学博物館等協議会ニュースレター

発行日 平成25年5月
発行者 大学博物館等協議会
編集 〒464-8601 名古屋市中区不老町
名古屋大学博物館 052-789-5767